近代英語辞書の発達

三　輪　伸　春

目次

はじめに　206
第１章　OE 期のラテン語辞書　208
第２章　初期近代英語辞書発達史　212
第３章　外国語と辞書　221
第４章　ルネッサンスと英語辞書発達史　226
第５章　初期の英語辞書：難解語辞書
（１）Robert Cawdrey, *A Table Alphabeticall* (1604)　236
（２）John Bullokar, *An English Expositor* (1616)　236
（３）Henry Cockeram, *The English Dictionarie, or An Interpretor of Hard English Words* (1623)　239
（４）Thomas Blount, *Glossographia* (1656)　243
（５）Edward Phillips, *The New World of English Words* (1658)　246
（６）Elisha Coles, *An English Dictionary* (1676)　249
（７）John Kersey, *A New English Dictionary* (1702)　254
（８）Nathan Bailey, *An Universal Etymological English Dictionary* (1721)　254
（９）Nathan Bailey, *Dictionarium Britannicum or a more COMPLEAT UNIVERSAL ENGLISH DICTIONARY* (1730)　254
（10）T. Dyche & W. Pardon, *A New General English Dictionary* (1735)　254
（以上，本号：以下，次号）

(11) ジョンソンの辞書
Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755)
(12) C. Richardson, *A New Dictionary of the English Dictionary* (1836-37)
(13) T. Sheridan, *A General DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE* (1780)
(14) J.Walker, *A Critical Pronouncing Dictionary* (1791)
第6章　近代英語辞書に掲載されたギリシア借用語
1．序
2．コードリの辞書に掲載されたギリシア語の特質
表1，表2，表3
参考文献

はじめに

世界中のどの国よりも，イギリス，アメリカには優れた辞書が数多く出版されてきた。日本における英語関係の辞書が，フランス語，ドイツ語，イタリア語を始め，他のどの外国語の辞書に比べても，質の面，量の面，あるいは種類の多さという点でも，格段に優れた辞書が出版されているのは，他の言語に比べて英語の学習者人口が多く需要が多いということもあろうが，本場のイギリス，アメリカで優れた辞書が多数出版されているということが大いに関係している。イギリスのオックスフォード系の辞書，アメリカのウエブスター系の辞書を始めとして英語圏で出版されている質量ともに優れた辞書を参考にできるので，日本における英語の辞書出版は他の外国語辞書に比べて盛んであるといえる。

では，どうして英語圏に辞書出版が盛んであろうか。それは英語という言語が辿ってきた歴史と深く関連する。すなわち，英語はその歴史の最初期から現代英語に至るまでその時期その時期ごとに絶えず辞書を必要とする事情があった。その歴史上，絶え間なく辞書を必要とする風土が，数多くの辞書を生みだ

し，結果として，イギリス，アメリカを辞書先進国にした。

イギリス，アメリカの辞書編纂の技術は優れている。歴史的に見て，特にイギリスの辞書が優れた歴史を持っている。が，歴史的な事件の多くがそうであるように，イギリスの辞書編纂の技術も一朝一夕にして完成されたのではない。英語は正にその歴史の始まりと共に辞書を持ち，以来今日に至るまで営々として辞書の編纂出版に努力を惜しまなかった。その結果，多くの優れた英語辞書が産み出されてきた。

OED (The Oxford English Dictionary) の最初の編集者であるマレー（J.A.H. Murray）は，イギリスにおける辞書（編纂史）研究の先駆的研究である，*The Evolution of English Lexicography* (1900) で次のようにいう。

> For, the English Dictionary, like the English Constitution, is the creation of no one man, and of no one age; it is a growth that has slowly developed itself adown the age. Its beginnings lie far back in times almost prehistoric. (...) As to their languages, they were in the first place and principally Latin: (...)
>
> (J.A.H.Murray, *The Evolution of English Lexicography*, 1900, p. 7)
>
> （というのは，英語の辞書は，イギリスの憲法と同じように，一人の人が創りあげたのでもなければ，ひとつの時代に創りあげられたのでもない。時代を経るにしたがって自ずから，ゆっくりと成長してきたのである。その起源は遥か英語史以前に遡る。対象となった言語は，最初に，そして，主にラテン語であった。）

OE 期に始まり ME 期にかけて，ラテン語辞書を初めとしてフランス語辞書も多数出版され，それ以後，外国語—英語辞書は発展の一途を辿る。そして，ついに1604年に，辞書史上画期的な事件である，英語を英語で説明した辞書，すなわち，英語の国語辞書が初めて出版される。多くの歴史的事件がそうであるように，この辞書は全く唐突に，自然発生的に生み出されたのではなく，先行する時代の流れの中で，外国語辞書が次々と編纂出版され続けてゆくうちに，

徐々に意識と経験が培われ，積み重ねられ，十分に基盤整理がなされた上で編纂出版されたのである。

古期英語以来やむことなく出版され続け，徐々に編纂技術を高めてきた外国語辞書編纂の経験の蓄積，古期英語以来，流入し続ける外国語を習得しなければならないという英語独特のやむにやまれない事情，流入し続ける外国語への深い関心，逆に，流入し続ける外国語への反発から生まれた国語愛護の意識，ルネッサンスによって生じた，古典語であるギリシア語，ラテン語，あるいはフランス語との比較から認識された英語の向上化運動，といった要因が背景にあって始めて英語の辞書の誕生と発展が実現し得たと考えなければならない。本章では，英語辞書の発生と発展の背景となった色々な要因を考えてみる。

第１章　OE期のラテン語辞書

古期英語期に既に，ラテン語の写本の難解な部分に易しいラテン語，もしくは古英語で施されたグロス（gloss）と言われる「行間の注解（interlinear glosses)」，そしてテクストのあちらこちらに加えられた註解を集めた「註解語彙集（glossary)」と称される，辞書の原点を思わせるものがある。例えば，スキートの *Oldest English Text* (EETS, OS.83, 1885) には *Epinal-Erfurt-Corpus, Leiden Glosses, Lorica-Glosses, Bedes' Glosses, Vespasian Psalter* といった最初期の註解集が収録されている。以下の例は，子供達にラテン語を教えるために作成された11世紀前半の *Æfric's Colloquy* (West-Saxon) に見られる，OE＝ラテン語の対訳である（【　】は筆者加筆，以下同じ)。

Hæfst þu hafoc ?

Habes accipitrem ?

【Do you have a hawk ?】

Ic hæbbe.

Habeo.

【I have】

Canst þu temian hiȝ ?

Scis domitare eos ?

【Can you tame it ?】

Ȝea ic cann. Hþæt sceoldon hiȝ me buton ic cuþe

Etiam, scio. Quid deberent mihi nisi scirem

【Yes, I can. What should they give me unless I could】

temian hiȝ ?

domitare eos ?

【Tame them ?】

(*Æfric's Colloquy, ll.* 127–130, Methuen's Old English Lib.
ed. by G. N. Garmonsway, 1975)

ひとつの写本にでてくるこのような行間注釈を集めれば，単語の意味を調べるのに個々の写本に立ち戻らなくても済む，また学生がラテン語の単語を覚える手助けとなる。これが「註解語彙集（グロッサリー)」の第１段階であり，*Leiden Glosses* がこの例である。

Item de ecclesiastica storia.

Colomellas : lomum.

carbunculi : poaas.

labrum, ambonem : heat.

pruriginem : bleci.

publite (poplite) : hamme.

editiones : thestisuir

fibrarum : darmana.

sescuplum : dridehalpf.

(*Leiden Glosses,* Skeat, *Oldest English Text,* p. 111)

個々の写本の語彙を集めたものから，一歩を進めたのが，各単語の語頭のアルファベットによりまとめた語彙集であり，*Epinal-Erfurt Corpus* にその例を見ることができる。これが第2段階。

【ラテン語】	:【英語】
clibosum(v)	: clibecti.
clustella	: clustorloc.
cladica	: wefl vel owef.
clinici	: faertyted.
clavus caligaris(-ius)	: scohnegl
clas(s) is	: flota.
clatrum (clathri)	: pearuc
clabatum(v)	: gebyrded.

(*Epinal-Erfurt Corpus,* Skeat, *Oldest English Text,* p. 51)

第3段階は，各単語の2番目の文字までのアルファベット順配列，そして3番目まで，と続く。その例は8世紀初頭の *Corpus Glossary* である。このような過程を経てできあがったアルファベット順グロッサリーが，17世紀初頭の英語辞典，即ち，難解語辞書の原型である。

ラテン語は口伝えに教えられていったので，これらのグロッサリーは，最初，ラテン語の単語を暗唱し易いように主題別にまとめられていた。この種の語彙

集はグロッサリーと別の系統をなす。例えば，身体部位，家畜，野生動物，魚類，木や植物等々。この段階は，言わばOE語彙集の第1歩で，*Leiden Glosses* にこの例を見ることができる。

verba de multis.

Fors　: uryd.
glis　: egele.
damma (dama)　: elha.
aleo　: tebl.
(...)

(*Leiden Glosses,* Skeat, *Oldest English Text,* p. 115)

1553語を収める植物の語彙集の例。

1. Abstinthium.　i. weremod
2. Absenti. i. Aloxomis
3. Abditus. i. ason. uel iouis barba.
4. Ablata. i. purgatorium simulat.

(*The Laud Herbal Glossary,* ed. by J.R.Stracke, 1974)

見出し語を主題別にまとめて配列することは，第5章(6)で述べる17世紀のコールズの英語辞書（1676年）の原型である。OE期からME期にかけての行間註解やラテン語—英語語彙集の伝統は16世紀前半まで続く。

辞書の形態を持ったもっとも初期のラテン語—英語辞書として知られているのは，*Medulla Grammacie* (*Gammatices,* c.1460) である。この辞書には多数の写本はあるが印刷されたことはなかったらしい。1500年には，キャクストンの1番弟子であるウィンキン・ド・ウォルド (Wynkyn de Worde) が，*[H]ortus Vocabulorum* というラテン語辞書を印刷出版した。この辞書は16世紀初めに広

く用いられた。

OE 期のラテン語—英語辞書に，既に初期近代英語期の英語辞書の雛形が完成されていたといえよう。

第２章　初期近代英語辞書発達史

16世紀に入ると，増え続けるラテン語，フランス語からの借用語に対応するために，ラテン語—英語辞書，フランス語—英語辞書は発展の一途を辿り，ついには外形，収録語彙数に関する限り，現在の中型から大型辞書に見劣りのしない辞書が何種類も編纂出版された。例えば，英語史上初めて辞書の表題の中に，dictionary の文字を用いた，トーマス・エリオット卿（Sir Thomas Elyot）の，*The Dictionary of syr Thomas Eliot Knyght* (1538) である。この辞書はすぐれた辞書であり，ラテン語—英語辞書に限らず，後世の辞書に大きな影響を与えた。この辞書の第１の特徴は古典ラテン語を対象としたことである。エリオット以前にもラテン語の辞書はあったが，それらはみな中世ラテン語を扱っていた（例えば，*Catholicon Anglicanum, Medulla Grammacie, [H]ortus Vocabulorum*)。ギリシア，ラテンの古典文芸再評価を目指すルネッサンス運動の影響のもとに初めて古典ラテン語を扱った辞書を編纂したエリオットは，1502年に出版されたカレパイン（Ambrosius Calepinus）の *Dictionarire des langues latine, italienne, etc.* を手本として，古典ラテン語の諸作品から自らの読書に基づき，権威ある作家の語彙，語句を多数収録した。最初の４頁（１頁２段組み）の平均収録語数は70語であるから，辞書全体の総語数は約24,150語ということになる。個々の作品の註解集，語彙集ではなく，古典ラテン語の語彙を網羅的に収録した編纂方針はその後のラテン語辞書編纂の方針となった。

エリオットは最初の原稿を印刷所に手渡した後も完成した原稿を不満としていた。エリオットの不満を耳にしたヘンリー８世は，エリオットを励まし，王室図書館の利用をすすめた。そこでエリオットは，直ちに印刷を止めさせるとともに，M の項以降を全面的に書き直した。印刷の済んでいた M より前の部

分は，巻末に，“The Addicion of syr Thomas Eliot Knight vnto his Dictionarye”として付加された。

付加されたAddicionの冒頭部分。

ABAGIO, gere, to serche a compasse in speaking, and not to consist or abide in one oratio or snetênse.

Abalienatio, alternation.

Abalienater, he that doth aliene or putte awaye a thinge, or altereth the possession thereof, an alienour.

(*The Dictionary of syr Thomas Eliot Knyght,* 1538)

ローマ数字による頁付け（No.）は途中36頁（No. I ～No.XXXVI）までと，飛んで39頁と40頁のみ（No. XXXIX, No. XL）であるが，辞書本体272頁とAddicion 74頁を加えて全部で約345頁。

エリオットの辞書は，1542年，1545年，1559年にクーパー（Reverend Thomas Cooper）による改訂版を出している。そのクーパーは，エリオットの辞書を吸収して更に大部な辞書を出版した。それが，

T.Cooper, *Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae* (1565)

である。クーパーの辞書の1578年版はフォリオ版1,300頁余りもある大部なものである。頁数で言えば，*OED* 第2版（平均頁1,000頁）1冊分以上あることになる。古典ラテン語のキケロ，ヴァージル，テレンス，タキトウス，ホラチウス，プリニウスといった著名作家から，単語，成句を多く収録し，それにいちいち英語訳をつけていった。アルファベット順に配列し，大きい見出し語をたてて，その単語を含む熟語，成句は，その単語の下に頭を下げて配列するという工夫も見られる。例えば，Mare“海”の項は，

Mare, maris, n. g.	**The sea**
Accessus maris.	**The flowing of the sea.** Vide ACCEDO.
Acquor maris. Virg.	**The playne broadeness of the sea.**
(...)	
Aspera maris. Tacit.	**Troublous places of the sea.**
Rabies maris.Virg.	**The raging temper of the sea.**
Via tuta maris. Ouid.	**The safe passage of the sea.**
(...)	
Importuosun mare.Tacit.	**A sea that hath no conuenient havens.**
Iratum. Horat.	**The sea tempestuous and troublous.**
(...)	
collucer mare a sole. Cicero.	**The sea glittering with sunne beame.**

(T.Cooper, *Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae,* 1578年版, Mare)

という具合に始まり，Mare だけで約80項目を収め，そのほとんどに英語訳を付けていて，英語の表現辞典としても十分に有用である。現に，シェイクスピア，マーロー，スペンサー，ベン・ジョンソン等はこの辞書に大きな恩恵を受けたとされている。主見出し語の下に成句を追込みで載せることは後のコールズ（E. Coles, 1676）の原型となっている。巻末には150頁にわたる付録があり，国名，人名，河川名，都市名，民族名をかなり網羅的に収録し，説明を加えている。その例。

Aborigines, or Aborigenes, People which first helde the country about Rome, and lyued abroade, hauing no house. They may also be taken for any other people, whose beginning in not knowne.

(Rev. Thomas Cooper, *Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae,* 1578年版，付録１頁目)

このように国名，人名だけを独立して扱うのも後のE. コールズの英語辞書(1626) の原型となっている。

エリオットとクーパーの辞書が英語辞書発達史に与えた影響は，ラテン語の単語，特にラテン語の色々な成句や文を英語に翻訳し，定義する際に英語のイディオムを用いた点である。ラテン語辞書に新しい創意工夫をもたらしたが，これだけ大部な辞書にラテン語に相当する英語の熟語を捜して記述してゆくことは大変であっただろうが，この苦労は17世紀のイギリス辞書編纂家たちが，英語に借用されたラテン語起源の難解語を定義する時にエリオットとクーパーの辞書を大いに活用しているという意味で報われることになる。更には，現在のラテン語辞書の中にもクーパーの辞書の影響を見出すことができる。

ラテン語に次いで必要とされた外国語はフランス語であり，フランス語の文法書，辞書も時代の要請するところとなった。その要請に応えたのが，ヘンリー8世のフランス語の先生であったポールズグレイブ (John Palsgrave) の著した，有名な *Lesclarcissement de la langue Francoyse* (1530) である。フランス語文法の本としての最初のものは，バークレイ (Alexander Barclay, *The Introductory to wryte and to pronounce Frenche,* 1521) であるが，もっとも網羅的で重宝がられ，16世紀中を通してフランス語学習に大きな影響力を持ったのは，ポールズグレイブのこの本であった。その後もフランス語学習書の種本となったこの本は，フランス語学習を組織的にするために単なる辞書だけでなく，「フランス語文法」，「フランス語学習指導要領」，「英語—フランス語語彙集」を併せ備えていた。そして，語学学習書として優れた内容を持った本書は近代期まで大いに活用された。「献辞 (The Authours Epistell to the kynges grace)」(1p.)，全体の概要を述べた「序章 (The Introduction)」(24pp.) に続いて，第1巻 (p.1–p.28。頁付けは見開き2頁の右上だけなので実質頁数は2倍になる。以下同じ) では発音 (The fyrste boke wherin the true soundyinge of the frenche tonge resteth)，第2巻 (p.29–p.60) では文法 (品詞論)，第3巻では性，数，そしてその後に，英語—フランス語の辞書 (品詞別語彙集) が名詞編，形容詞編，代名詞編 (文法の説明付き)，数詞編，動詞編 (文法の説明付き)，副詞編と続き，辞書の部分

だけでも実質900頁になる。この語彙集の特色は，英語の見出し語に，必要な場合には他の英語の類義，同義の語を付けていること，それに単語ばかりではなく，熟語の形で掲載していること，特に，動詞の場合には文章で例を示していることである。現代の辞書が備えるべき基本的要件をある程度備えているという意味でも辞書編纂法の発展に大いに貢献している。語彙集のうちから，名詞，形容詞，動詞の各記述例を示す。名詞編より。

B before O

Bobet on the heed	covp de poings (...) ma.（この項 *OED* にあり）
Bobbyn for a sylke woman	bobbin s. fe.
Bocher that kylleh flesshe	bovchier s. ma.
Bochery	bovcherie s. fe.
Body	corps ma.
Body of a churche	nef de lafglise (...) ma.

（p. xxi：頁付けは２頁見開きの右上にのみある）

なお，ポールズグレイブは，pacquet をフランス語として掲載しているが，実は，pacquet は英語からフランス語に借用された語である。

Pacquet of letters pacquet de lettres, &c.

(p.1ii)

フランス語 pacque から派生した指小辞であれば pa(c)quette となるはずだからである。形容詞編より。

wayghty/heauy ma.masif (...)

fe.massifue s. ma.pesant s.fe.pesãte s.

Wanne of coloure ma.et fe.

palle s.ma.yndeux. fe.yndeuse s.ma.

et fe.blesme s.

Wanton of condycions　ma.et fe.

faffre s. ma.mignot (...) fe mignotte s.

ma.friant s.fe.frande s.

Warfull　ma.batailleux fe.batilleuse s.

Werysshe as meate is that is nat well

tastye　ma.st fe. mal. sauoré s.

(p. xcix)

ここで，**wayghty/heauy** ma.masif fe.massifue とあるのは，wayghty は heauy と同義語であることを示し，フランス語の対応語は masif (男性形)，massifue (女性形) であることを示す。その次の２つのみだし (wanne of coloure, wanton of condycions) は成句で示されている。最後の見出し (werysshe as meate ...) は諺として扱われている（なお，この例は *OED* wearish の項に引用がある)。
動詞編より（単語のアルファベット構成順)。

A　before　T

I attayne or gette or come by a thynge / lattayngs, nous attayngons, vous attayge3, il3 attayngné t (...)

(p. clv)

A　before　M

I am to blame and am in the faute that a thyng is a mysse / Iay tort, iay eu tort, **By our Lady I am sore to blame** : Par nostre dame iay grãt tort. **Am I to blame if I repente me,** Ay ae tort si ie me repens.

(p. cxlviii)

（以上，J.Palsgrave, *Lesclarcissement de la langue Francoyse,* 1530)

更には，ポールズグレイブと同じく，ヘンリー８世の家庭教師であったウエ

ス（Giles du Wes）の *Intoroductrie for to lerne to rede to pronounce and to speke frenche trewly compyled for the right high excellent and most vertuous lady the lady Mary of Englande doughter to our most gracious souerayn lorde kyng Henry the eight* (1532?) といった外国語教師向けの参考書が出版された。この本はフランス語と英語の語彙集と行間対訳を中心とする手頃なフランス語—英語の学習書である。

これらの外国語学習書は，発音，文法，対訳，行間訳，語彙等の部分を併せ持っていた。イギリス人がフランス語を学ぶのは，貴族，上流階級，知識階級の公用語であるフランス語を習得するためである。逆に，イギリス人にフランス語を教育することを職業とするフランス人や，イギリス人相手に商売することを希望するフランス人も多く，そのためにフランス人に英語を教える目的を持った本も現れた。その意味で有名なのが，例えば，ベロット（J.Bellot), *Familiar Dialogves, for the Instruction of thé, that be desirous to learne to speake English, and perfectlye to pronounce the same : Set forth by Iames Bellet Gentleman of Caen* (1586) や，コールズ（E.Coles), *The Compleat English Schoolmaster. or the Most Natural and easi Method of Spelling English...* (1674) であり，フランス人用の英語学習書である。ベロットの本は１頁３段組で，１段目には英語，２段目にはフランス語訳，３段目にはフランス語のスペリングで英語の読み方を示している。例えば，

【英語】	【フランス語】	【発音を示す】
Ayles.	*Alix*	êl.
Yes truely, Goe	*Ouy vrayemés,*	Ys trùlé, Go
quickly.	*Allez tost,*	kouiklé
Ralf.	*Raphael.*	Ralf.
Good morrow	*Bon jour com-*	Goud maro co-
cosen Androw.	*sin André.*	sin Andro.

（Bellot, *Familiar Dialogves...*, 1586, 本文16頁）

16世紀後半になるとホリバンド（C.Hollyband）のフランス語—英語辞書，*A Dictionarie French and English*（1593），フロリオ（J.Florio）のイタリア語—英語語彙集，*Firste Fruites*（1578）が出版された。フロリオの語彙集は20年後，有名なイタリア語—英語辞書，*A Wolde of Wordes*（1598）へと発展する。

主見出し語のアルファベット順にフランス語の単語と熟語を取り混ぜて並べるという編纂方法を考えだしたC. ホリバンド，*A Dictionarie French and English*（1593）の Mont の項。

Vn mont ou montaigne, *a hill or maountaine*:m.

Passer les monts, *to goe ouer those mountaines called Alpes betweene Fraunce and Italy*:m.

Qui demeure dela les monts, *which dwelleth on the other side of the Alpes.*

Deça les monts, *on this side of the Alps.*

Promettre monts & vaulx, *to promise mountains of gold.*

Du mont à val, *that is,* du hault en bas, *from the top to the ground.*

（C. Hollyband, *A Dictionarie French and English,* 1593, Mont の項）

また，語学学習を目的とする辞書，文法書のほかに難解なフランス語の専門用語を解説した辞書も出版された。例えば，フランス語やラテン語の用語を多く用いる法律関係の人々からの要請に応えたのが，コウエル（J.Cowell），*The Interpreter:...Wherein set foorth the true meaning of all, or the most part of (...) Words and Termes, as are mentioned in Lawe VVriters, or Statutes of this victorious and renowned Kingdome, ...*（1607）である。コウエルはエリザベス朝にあって有名な法律学者であり，死去する前年の1610年までケンブリッジ大学の教授であった。この種の辞書としてはもっとも権威があり，度々改定されて，1729年に，G.ジェイコブズ（Giles Jacobs）の *New Law Dictionary* が出版されるまで広く用いられた。いずれの項目も説明が長い。以下は特に短い例。

Admittendo in socium, is a writ for the association of certaine persons to Iustices of affises formerly appointed, *Register. orig. fol.* 206. a.

(J.Cowell, *The Interpreter*…, 1607, *Admittendo in socium*)

その他，Thomas Thomas, *Dictonarium linguae Latinae et Anglicanae* (1587) 等大部な辞書が出版されているが，フランス語辞書のコトグレイブ (R.Cotgrave), *A Dictionarie of the French and English Tongves* (1611) は，この時期の外来語辞書の中でも画期的な辞書であり，質量共に優れていた。その例を示す。

Montaigne: f. *A mountaine, a great hill.*

Montaigne de Mars. *The fleshie part of the hand between the thumbe, and middle fingers; or the muscles whereof it is made; (a tearme of Anatomie.)*

Les hommes se rencontrent, & non pas les montaignes : Prov. *Men meet often, mountaines never.*

(R.Cotgrave, *A Dictionarie of the French and English Tongves,* 1611, Montaigne)

辞書本体は約1,200頁からなり，巻末にフランス語文法の簡単な解説がある。上の引用に見られるように，今まで言及したどの辞書よりも説明が詳細である。フランス語やフランス語の見出し語に対応する英語の単語を羅列するというのではなく，見出し語を含む熟語，成句は勿論，見出し語を含む法律用語の解説や世界の地名の説明など，後に述べるコケラム (H. Cockeram, 1623)，フィリップス (E. Phillips, 1658) の原型である。また，現在のアメリカの中型辞典によく似た編纂法である。

英語にはごく初期の頃から外国語が多数取り入れられた。外国語が多数取り入れられたがために，英語は外国語辞書を必要とし，外国語辞書を次々と編纂してゆくうちに辞書編纂技術が向上し，優れた辞書が次々に出版されるようになった。外国語が異常に多数取り入れられたこと，語彙が増加したことから語

彙そのものへの関心が高まったこと，外来語が異常に増加したことから，逆に自国語である英語への意識が高まった。更には，ルネッサンスにより古典語であるギリシア語，ラテン語，あるいはフランス語と比較すると，洗練されてなくて，語彙の貧弱な英語を向上させるために，外国語辞書という手段を用いて積極的に外来語が取り入れられた。このような複数の要因が重なり合うことにより英語の辞書は発達していった。即ち，辞書の発展は，多数の外国語借入と深く関連するので，次に英語と外来語との関係を簡単に述べる。

第3章　外国語と辞書

英語という言語は，その最初期から外国語との接触が絶えることがなかった。英語とそれを担うアングロ・サクソン民族の歴史は，一言で言えば，征服と被征服の歴史であった。アングロ・サクソン民族はその歴史を通じて征服と被征服を繰り返してきた。そして征服したり，征服を受けたりしている間に，必然的に非常に多くの外来語を受容してきた。英語が他の言語と違って異常に外来語が多いこと，しかも，同じゲルマン民族でありながら，アングロ・サクソン民族の英語には外来語が多く，ドイツ語には外来語が少ないのには事情がある。即ち，アングロ・サクソン民族の外国との接触の仕方には，他の民族の場合と著しく違った特徴がある。それは，アングロ・サクソン民族の場合，自分達と近しい民族から徐々に縁遠い民族へと，一歩一歩階段を上るがごとく慣らされていったのである。アングロ・サクソン民族，あるいは英語がどのような過程を経て外国語に慣らされ，外国語への違和感をなくし，ひいては，自国語による新語形成能力を消失していったのかという問題を考えてみる。

先史時代は別にして，ブリテン島の先住民はケルト民族であり，そのケルト民族をローマ軍が支配した。その後，ブリテン島に移住したアングル族，ジュート族，サクソン族は，支配したケルト民族からはもちろん，ケルト民族に借用されていたラテン語を再借用した。ブリテン島に移住する以前，未だ大陸に住んでいたゲルマン民族の一部であったアングル族，ジュート族，サクソン族は

大陸でローマ軍の支配下にあって，ローマ軍から日常生活の向上に，直接具体的に役立つ食物の調理法，生活必需品の生産方法，科学技術を習得した。アングロ・サクソン民族が大陸時代にどのようなことをローマ軍から学んだかについては，その時期に英語に借用されたラテン語から推定することができる。例えば，pound, street, camp, cheap, mint, belt, socks, butter, etc. これらの単語はいずれも今日のイギリスの日常生活を支える基本単語であり，それだけにこの時期にローマ軍からアングロ・サクソン民族が学んだのは，洗練された古典文学，哲学ではなく，まず日常の生活水準の向上に役立つ事物であった事が分かる。ブリテン島に移住した後は，ケルト語と接触するが，アングロ・サクソン民族がケルト人から学んだことは余り多くなく，少数の語を除くと，ケルト語は河川名，山岳名，人名，都市名に残っているに過ぎない。

アングロ・サクソン民族のブリテン島移住後，『アングロ・サクソン年代記(*The Anglo-Saxon Chronicle*)』によると，西暦787年に初めてイギリスに襲来したヴァイキングは（7 on his dagum common ærest・iii・scipu Norðmanna of Hereða lande. “And in his days came first three ships of Norwegians from Hörthaland”），徐々に襲来の勢いを強め，851年にイギリスで初めて冬を越す（7 hæðene men on Tenet ofer winter ge sæton “And the heathern stayed in Thanet over the winter”）。更に，イングランド北部から南部へと植民地化を進めた。ヴァイキングの王グズルム（Guthrum）は，878年にはアルフレッド大王と和解を結び，ロンドンからチェスターをワトリング街道で結ぶ線の北東側を領土とした。これがデーンロー（Danelaw = デーン人の法に従う地域）である。一時，互いに戦い合い，国境まで設定したが，デーン人は，もとはといえば同じゲルマン人であり，アングロ・サクソン民族の大陸時代には，現在のデンマークの南方辺りで隣り同士で暮らしていた民族なのである。従って，クヌート王（Cnut, Canute）のイングランド支配の頃から両民族は次第に融和し始めていた。920年以降にはイングランド人によるデーンロー奪還もあったが，他の民族間の対立の場合とは違って，ヴァイキングとして海を渡ってきたデーン人は，もともとアングロ・サクソン民族と，言語・風習・習慣・社会・文化・宗教が同じであったので，

融和し合うことができたのである。ブリテン島に移住後，アングロ・サクソン民族が初めて出会った異民族がもともと同じ民族であったデーン人であったことがアングロ・サクソン民族とその言語である英語のその後の行く末に大きな影響を及ぼすことになる。

歴史上，デーン人の後にブリテン島に侵攻してきたのはノルマン人である。ノルマン（<“North man”）人というのは，896年にブリテン島でアルフレッド王に撃退されてセーヌ川に入ったヴァイキングの大軍に端を発するので，やはり北欧ゲルマンのヴァイキングであり，デーン人がブリテン島を襲撃したのと同様に，フランス本土を，ロワール川，セーヌ川，メイン川等を逆のぼり，パリ，ルーアン，バーユー，セントロー等を襲った一派である。この一派はたびたびパリを襲撃したので，西フランク王シャルル「愚直王」はロロ（Rollo）を頭領とする一派に，セーヌ川下流の肥沃で果実栽培に適した土地を領地として与えた。これがノルマンディ（“ノルマン人の土地”）である。即ち，ロロ大公とノルマンディ公国の誕生である。そこにしばらく定住しながら，イングランドのエドワード「告白王」(Edward the Confessor）と親交があり，宮殿に多数取り入れられていたノルマン人は，1066年にエドワード王が没すると，イングランドは自分達の先祖であるクヌートが支配していた土地であると主張して，イングランドの王位継承権を主張し，ノルマンディ公ウイリアム（Duke William of Normandy）の指揮のもとにイングランドに攻め入り，1066年にイングランド南部のケント州ヘイスティングス（Hastings）の戦いでイギリス軍に勝って，以後２世紀にわたってイギリスを支配した。

もともとは，デンマーク，ノルウェーから来たヴァイキングであるが，ノルマンディに定住した彼らは，すぐにフランス語を話すようになっていた。キリスト教文化，美術の熱心な信奉者となり，フランス中でももっとも美しい教会建築を建てた。ウエストミンスター寺院もアングロ・サクソン風建築ではなく，ノルマン人と親交のあったエドワードの好みでノルマン風建築である。1020年には十字軍にも参加するまでになった。従って，ノルマン人は北方のゲルマン人としてではなく，フランス人としてイギリスに渡ってきた。もともとは北方

のゲルマン人でありながら，フランスの言語，文化，宗教（キリスト教）を身につけたノルマン人が，生粋のゲルマン人であるデーン人の次にやってきたことは，英語の歴史に大きな意味を持つ。というのは，ひとつには，まず最初にやってきた“異民族”が生粋のゲルマン人，即ちアングロ・サクソン民族と全く同じ民族であるデーン人であり，次にやってきたのがもともとゲルマン民族でありながら，文化，宗教（キリスト教），言語をフランス化したノルマン人である。イギリス人にしてみれば，唐突に，まったく未知の異民族がやってきた場合に比べれば，デーン人，次いで，ノルマン人という順序は，異民族に徐々に慣らされてゆくという結果になり，後世，世界中の色々な異民族と抵抗無く接する素地を作った。

もうひとつアングロ・サクソン民族にとって重要なことは，もともとゲルマン人であったノルマン人がフランス語（正確には，フランス語のノルマンディ方言）を話していたということである。というのは，言語にとって外面史である，政治，社会，経済における征服と被征服の歴史は，ローマ軍，ケルト人，デーン人，ノルマン人との接触までであるが，15世紀に始まるルネッサンスになると，文芸復興運動により，社会，政治といった外面史ではなく，言語の内面史に深く関係する，ギリシア語，ラテン語，そして古典の文化・文学・哲学が再評価され，ローマ，ギリシアの文学・思想がフランス語訳を経由してイギリスにもたらされたとき，既にノルマン・フランチによってフランス語に慣らされていたアングロ・サクソン民族にはパリの中央フランス語（Central French）に抵抗なく融和することができた。フランス語を通じて必然的にラテン語がイギリスに多量にもたらされた。ラテン語によるローマの古典がイギリスにもたらされた時，英語にとってラテン語は未知の言語ではなかった。というのは，周知の通り，フランス語はラテン語の直接の末裔であり，ノルマン・フレンチ，次いで中央フランス語に既に十分なじんでいたアングロ・サクソン民族にとってラテン語は全く未知の言語というわけではなかった。従って，ローマ古典がイギリスにもたらされると，ラテン語はそれ程抵抗なく英語に取り入れられてしまった。

アングロ・サクソン民族とその言語である英語にとって，その最初期からの外国語との接触の仕方は，英語の外国語に対する接し方に決定的な影響を与えた。即ち，もともと同じ北ゲルマンの土地に住んでいたデーン人に最初接して，次に，もともとはアングロ・サクソン民族と同じく，北ゲルマンの地に住んでいて，基本的にはゲルマン民族でありながら，言語をフランス語に換えたノルマン人と接した。そして，ノルマン人を通じてフランス語に慣らされたアングロ・サクソン民族は，次にフランス語の祖語であるラテン語に出会った。このように，同じ言語，同じ民族であったデーン人から，もとはといえば同じ民族であり，同じゲルマン語をもっていたが，フランス語を使うようになったノルマン人と接することにより，まずノルマン・フレンチ語に慣らされ，次いで中央フランス語に慣らされたアングロ・サクソン民族は，徐々に，しかし確実にラテン語受け入れへの素地を形成していた。従って，ルネッサンス期には，本来ならばかなり異質の言語であるラテン語を受け入れる用意がすっかり整っていたことになる。ノルマン・コンクエストにより，フランス語がイギリスにもたらされたことは歴史上の偶然であったが，結果として，その後にもたらされたフランス語，ラテン語受容への下地となったことは，偶然とはいえ，英語の外来語への違和感，抵抗感を取り除く大きな要因となった。フランス語からラテン語に慣らされていた英語にとって，ラテン語と密接な関係にあり，ラテン語に深く，広い影響を与えたギリシア語はもはや全く異質の言語ではない。こうして，英語はおよそ外国語というものへの違和感を消失してゆくにつれて，逆に，古期英語の時代には旺盛であった英語本来語による新語形成能力，派生語形成能力を徐々に失っていった。古期英語の時代には外来語からさえも自由に派生語を形成していた。例えば，ラテン語の dīrigere “to lead”, dīrē ctus (p.p.) から OE dihtan “to direct”, diht “order”, dihtend “director”, dihtere “expositor”, dihtnere “steward”, dihtnian “to dispose”, dihtung “disposition”，等が派生した。しかし，外国語に徐々に慣らされた結果，英語はその本来の造語能力，派生語形成能力を失い，新しい事物・概念を表現するのに外来語をそのまま借用して英語の語彙に受け容れるようになった。従って，エリザベス朝以降イギリ

スが海外に雄飛して，ヨーロッパ世界とはまるで異なる，アメリカ新世界，アフリカ，アジア，オセアニアから，旧世界にはなかった事物・概念とそれを表す外国語がもたらされても，それ程抵抗なく，現地語のままことごとく受け容れるようになってしまった。このことが，同じゲルマン語でありながらドイツ語には外来語が少なく，英語には甚だしく外来語が多い原因である。外国語を多数受け容れたがために，幾種類もの外国語辞書が必要とされ，外国語＝英語辞書が次々と編纂され，出版され続けてゆくうちに辞書編纂術は発展し，質量ともに優れた辞書が出版されるようになった。そして，外国語辞書の優れた編纂技術は国語辞書としての英語辞書のあり方に深く大きい影響を与えた。

第4章　ルネッサンスと英語辞書発達史

英語が徐々に外来語に慣らされ，外来語をどんどん取り入れる一方，本来の造語能力を失ってゆく傾向を一層推進する事件が起こった。15世紀に始まるルネッサンスである。1453年，オスマントルコが東ローマ帝国を滅ぼした時に，首都コンスタンチノープルで長きにわたってギリシア・ラテンの古典文化・文学・思想の伝統を守り続けてきた学者達がヨーロッパ諸国に亡命し，ヨーロッパ各地に古典ギリシア・ローマの文化を伝え，ヨーロッパ全土にルネッサンスの花が開いた。その上，イギリスでは，キャクストンが印刷術をもたらし，ウエストミンター寺院で印刷を開始した。ルネッサンスによりイギリスでも古典文学普及は時代の要請するところとなった。教育の普及，読書人口の増加，それに比例して古典を読みたいという要望が一般読書人の間に広がっていった。キャクストンが始めた活版印刷は，このような時代の要請に応える所となり，古典を英語に翻訳して印刷出版する作業が盛んにおこなわれた。その結果，1500年から1640年の間に印刷出版された本の種類は20,000種に及んだ（モセ，118頁）。

しかし，キャクストン自ら，そしてその後の多く学者達が古典を英語に翻訳しようと試みた時に，彼らが共通して切実に感じたことは，古典文学を翻訳し

て引き移すには英語の語彙が甚だしく貧弱であるということであった。そのことは，キャクストンが翻訳出版した本の序文にある通りである。例えば，キャクストンは，「粗野で不完全な英語（the rude and unparfyght Englyssh, *Book of Good Manners*, Prologue, 1487年印刷，(N.F. Blake, p. 61)）」，「英語はとても粗野で野卑だから私にはとても理解できない（and certaynly the Englysse was so rude and brood that I coude not wele understande it. *Eneydos,* prologue, p. 79, 1490年翻訳）」と不満を述べる一方，フランス語については，「フランス語の優雅で上品な用語と単語（the fayr and honest termes and wordes in Frenshe）」と評価している（*Eneydos,* prologue, p. 79）。

キャクストンを始め当時の翻訳家達は異口同音に，古典語であるギリシア語，ラテン語は勿論のこと，英訳する際に直接の原典としたフランス語と比べても自分達の言語である英語が洗練されていないこと，具体的には英語の語彙が不足していることを嘆いている。

そこで学識経験者達は，英語を洗練された言語にするために，具体的には，英語の語彙を豊富にするために懸命の努力を続けることになる。

初期の，ラテン語—英語辞書，フランス語—英語辞書，イタリア語—英語辞書は，外国の難しい単語を英語で説明するという目的のほかに，外国の豊富な語彙，表現法をそのまま英語に移そうという明確な意図があった。従って，例えば，コトグレイヴの『フランス語—英語辞書』には，

> Commemorable:com.*Commemorable, memorable, worthie to be mencioned, fit to be remembred.*
>
> (Cotgrave, *A Dictionary of the French and English Tongues,* 1611)

とあり，あたかもフランス語の commemorable に対応して英語に commemorable という単語があるかのような記述があるが，*OED* に見る限り commemorable という単語が英語史上，いかなる作家によっても使われた例はない。また，ブラントの辞書には，

Liquescency, the same.【直前の Liquefaction (...) a melting, or making soft, or liquid, a dissolving と同義の意】

(Blount, *Glossographia,* 1656)

とあり，liquescency はその後，フィリップス (Phillips, *The New World of Words,* rev. by J.Kersey, *OED*による1706年版による：初版にはない) にも収録され，ジョソンの辞書 (1755) に収録されたことにより，生き永らえて現代英語の辞書にも収録されている (例，*Chamber's Twentieth Century Dictionary,* 1975)。しかし，この単語も一般の英語の単語として用いられたことは全くない。これらの単語は当時の辞書の編纂者が英語に普及させようとして意図的に造語して辞書に載せたものである。更に，シェーラー (1977, p.50) によれば，コケラム (1623) には，ebriolate "to make drunk", dedoceate "instruct", edormiate "to sleep out one's fill", edurate "to harden", exarcamate "to wash off gravel", mansitate "to eatofte", missiculate "to send often", oculate "to put out one's eye" 等が語義説明に用いられている (見出し語にはない)。が，英語史上，コケラム以外には誰一人としてこれらの単語を用いていない。従って，*OED* にも収録されていない。古期英語期から中期英語期にかけては，アングロ・サクソン民族が辿った歴史的な事情から必然的に外国語が夥しく流入し，中期英語期以来近代英語期に入ってからも，劣等言語である英語をなんとか古典語やフランス語に近ずけようとする努力が続けられた結果，英語に非常に多くの外国語が借用された。キャクストンを始め，ルネッサンス期の翻訳家達が英語にもたらした多数の難解な外国語は，必然的に，辞書出版への気運を高めた。

また，英語の語彙に外国語が非常に多くなり，15－17世紀の頃には余りに外国語が多くて，公共機関での教育が制度上受けられなかった女性や，外国との交易をする商人達は，難しい外国語に不自由を強いられた。更には，日常生活に不便や混乱をもたらすほどであった。

日常生活に不便をもたらす難解な外国語は，当時既に「インク壷言葉 (ink-horn terms)」として非難され，悪評高かったことは，有名なパトナム (Geroge

Puttenham) の *The Arte of English Poesie* (1589) をみれば分かる。

> I must recant and confesse that our Normane English which hath growen since *William* the Conquerour doth admit any of the auncient feete, by reason of the many *polysillables* euen to sixe and seauen in one word, ... : and which corruption hath bene occasioned chiefly by the peeuish affectation (...) of clerkes and scholers or secretaries long since, who not content with the vsual Normane or Saxon word, would conuert the very Latine and Greeke word into vulgar French, as to say innumerable for innombrable, reuocable, irradiation depopulation and such like, which are not naturall Normans nor yet French, but altered Latines, and without any imitation at all: which therefore were long time despised for inkhorne termes, and now be reputed the best & most delicat of any other.
>
> (Puttenham, *The Arte of English Poesie,* 1589, rpt. p. 130)

英語本来語やノルマン・コンクエスト以来の一般民衆になじんだ単語に満足しなかった僧侶，学者，写字生達がギリシア語，ラテン語から勝手に造語して標準フランス語らしく見せかけて英語に持ち込んだこの種の難解な外国語はその後だれも用いなかった。そこでそういう類いの単語を「インク壷言葉 (inkhorn terms)」と称して評判が悪かったが，現在では非常に優れた語として評価されている，というパトナムの評言である。

この「インク壷言葉 (inkhorn terms)」という表現は，後に述べるコードリを始め難解語辞書の序言にもたびたび使われていることから，流行語のように人々の間に用いられ，ひいては「インク壷言葉 (inkhorn terms)」のレッテルを貼られた難解な外来語がいかに巷に氾濫していたかが分かる。コードリの序文から。

> To the Reader.
>
> Svch as by their place and calling, (but especially Preachers) as haue occasion to speak publiquekly before the ignorant people, are to bee admonished, that they

neuer affect any strange ynkhorne termes, but labour to speake so as is commonly receiued, and so as the most ignorant may well vnderstand them.

(R.Cawdrey, *A Table Alphabetaicall,* 1604, 表紙から5頁目)

このように難解な外国語が蔓延して日常生活に不便と混乱をもたらしたことが辞書隆盛の大きな要因である。

シェクスピア時代の外国語：マラプロピズム

教育制度が十分でなかった当時にあって，一般大衆が難解な外来語のためにどれほど困った状態にあったかを象徴する現象がマラプロピズム (malaprop-ism) である。マラプロピズムというのは，難解な外来語を間違って使って周囲の笑いを誘ったり，コミュニケーションに不都合をもたらす現象である。難解で多音節のフランス語，ラテン語を用いるだけでも厄介なことなのに，その難しい単語を間違えて発音するのであるから，学校教育の決して十分ではなかった当時の観衆にとって，シェイクスピア，ヘイウッド，ミドルトン，ジョンソン等の劇作家のなかで盛んに用いられたマラプロピズムを理解し笑うということは決してやさしいことではないように思われる。しかし，マラプロピズムが間違いなく劇的効果を産んで，観客の笑いを誘っていたのはなぜかという視点からシェイクスピアのマラプロピズムの実例を検討してみると，マラプロピズムが劇的効果を産みだした背景には，作家と観客の間に共通の認識事項があったようである（シェーラー，1982, p.126)。まず第１に，マラプロピズムに用いられた多音節語は，1500年以前に借用された語であって，借用されてからかなりの時を経ており，シェイクスピア劇の観客は，伝統的にマラプロピズムとして用いられることが習慣化していた単語を熟知していたようである。第２に，マラプロピズムを犯す登場人物も名前からして明らかに下層階級で教養のないような名前で，マラプロピズムを犯すことが予想できるようになっている。例えば，『ウインザーの陽気な女房達』，『ヘンリー４世第２部』，『ヘンリー５世』のクイックリー夫人 (Mrs. Quickly)，『空騒ぎ』のドッグベリ (Dogberry)，『恋

の骨折り損』のダル (Dull),『尺には尺を』のエルボウ (Elbow),『ウインザーの陽気な女房達』のスレンダー (Slender),『真夏の夜の夢』のボトム (Bottom)。これらの人々の名前は，フランス語風の貴族の名前ではなく，明らかに下層階級のアングロ・サクソン民族である。従って，よく知りもしないラテン語，フランス語を無理に使って間違えることを予測できる人物である。更に，第3には，マラプロピズムの実例を分類してみると，単語の構造を分析した上での明確な「間違え方の型」があった。即ち，単語の語根を間違える，接頭辞を間違える，接尾辞を間違える，の3つの型があった。例えば,『ウインザーの陽気な女房達』でクイックリー夫人が,

Mrs.Quickly: I warrant you, in silke and golde, and in such alligant termes.

(MMM, Ⅱ.Ⅱ. 62)

クイックリー夫人「いっときますけどね，うっかりするほどの絹や金のお召し物で」

と言った時，elegant を alligant と間違えている。この場合の間違え方は，語根を間違えたのである。『コリオレーナス』の召し使いが,

Servant: whilest he's in Directitude

(Coreloranus, Ⅳ.Ⅴ. 208)

召し使い「あの男が不幸をこかっているかぎり」

と言った時にも，directitude は aptitude のつもりであるから語根の間違いである。『ヴェニスの商人』でランスロット・ゴッボ (Launcelot Gobbo) が,

Laun. (...) I was always plain with you, and so now I speak
my agitation of the matter.

(Mer., Ⅲ.V. 4)

ランスロット「私はあんたにいつも本当のことを言ってきたし，今度もことのヒン相を話しますよ」

と言った時は，cogitation というべきところを agitation といっているので，接頭辞の間違いである。同じく，『恋の骨折り損』でダル (Dull) とホルファニース (Holfernes) とのやりとり。

Hol.: (...) The allusion holds in the exchange.

Dull: 'Tis true indeed: the collusion holds in the exchange.

Hol.: God comfort thy capacity! I say, the allusions holds in the exchange.

Dull: And I say polusion holds in the exchange, (...)

(LLL, Ⅳ.Ⅱ. 42-46)

ホルファニース「この諷喩 (allusion) はアダムをケインと交換しても (in the exchange) 通用する」

ダル「なるほど，交換所では (in the exchange)，あやしげなこと (collusion) が通用しますからね」

ホルファニース「ああ，この男の頭ときたら！わしはなこの諷喩は交換しても通用すると言っておるのだ」

ダル「それで，手前は，交換所では，かがらわしいことが (pollusion) が通用するともうしておりますがね」

ここでは，allusion，collusion，polution がそれぞれ接頭辞の間違いである。次の例は，接尾辞の間違い。『ヴェニスの商人』でのランスロット・ゴッボの台詞。

Laun.: (...) Certainly, the Jew is athe very devil incarnal; (...)

(Mer., Ⅱ.Ⅱ. 28)

ランスロット・ゴッボ「たしかにあのユダヤ人は悪魔が人間に化けたんだ」

この場合の incarnal は incarnate であるから語尾の間違い。

Bard.: Out, alas, sir! cozenage, mere cozenage!

Host.: Where be my horses? speak well of them, varletto.

(Merry Wives, Ⅳ.V. 66-67)

バードルフ「てーへんだ，旦那！やられた，とんでもねえかたりだ」

主人「馬あどうした？　具合の悪いことは言わんといてくれよ，大将」

イタリア語風の varletto は正しくは varlet で語尾の間違い。ただし，わざと間違えて，バードルフの人物描写の効果を狙った。

このように難しいラテン語，フランス語をひっきりなしに間違えて使うというマラプロピズムがそれなりに劇的効果を期待できたということは，当時の観客，あるいは一般庶民は蔓延する外国語に慣れっこになっていた。換言すれば，当時の人々の外国語に関する知識は相当あったと思われる。

シェイクスピア，ミドルトン，ジョンソン等がしきりにマラプロピズムを劇中で用いたということは，当時の庶民の間でマラプロピズムに類する外国語が原因で引き起こされるコミュニケーション上の混乱が，日常茶飯事のごとく起こっていたということである。人々の日常生活でマラプロピズムに類する事件が頻発していなければ，マラプロピズムが劇中で用いられても効果を期待できないからである。

マラプロピズムが，劇の中で観衆の注意を引き付けたり，座興として笑いを誘う手段として用いられているだけならばなんの問題もないのであるが，難解な外国語を日常生活にやたら使ってしかも，頻繁に間違えては失笑をかい，誤解を生じるようでは当然のことながら不都合である。従って，例えば，役人はフランス語，ラテン語で書かれた法律文書を読むために，貴族は政治の場で，あるいは社交の場で当然使われたフランス語を習得するために外国語を習得する必要があった。あるいはまた，当時は，貴族といえども制度として教育を受けられなかった婦女子，そして，フランス人と取り引きをする商人も難解な外

国語を分かり易く説明した辞書，文法書出版への要望を強く持っていたに違いない。こういった事情が辞書を生み出す要因となった。

そのような要請に応えて，まずラテン語—英語辞書，フランス語—英語辞書，イタリア語—英語辞書等の外国語辞書が出版された。注意すべき点は，当時は，辞書というのは外国語—英語辞書であって，それ以外ではなかったということである。英語を英語で説明する辞書即ち，国語辞書というのは彼らの念頭にはまったくなかったのである。最初は，外国語の文法解説，正しい綴りの一覧，語彙集が一緒になった形の本が出版された。そしてそれが徐々に大部になってきて，文法解説は文法書として独立し，綴り字一覧，語彙集は外国語辞書として独立し，外国語—英語辞書は質量ともにかなり高度な水準で編纂出版された。外国語辞書が辞書として十分完成の域に達した時，外国語辞書編纂の経験に基づいて英語を英語で説明した辞書，即ち，外国語—英語辞書ではなく，国語辞書としての英語辞典が出版される環境が整ったと言えよう。

英語辞典の出現を促す環境が整ったことを証明する証拠をマルカスターに見ることが出来る。マルカスターは，*The First Part of the Elementarie which entreateth cheflie of the riht writing of our English tung, set furth by Richard Mulcaster* (1582) の第24章（The vse of the generall table.）で次のように書いている。

> It were a thing verie praiseworthie in my opinion, and no lesse profitable then praiseworthie, if somone well learned and as laborious a man, wold gather all the words which we vse in our Enlgsih tung, wheterh naturall or incorporate, out of all Professions, as well learned as not, into one dictionarie,...
>
> (R.Mulcaster, *The First Part of the Elementarie...*, 1582, p. 166)

そして，その一節の欄外には，

> A perfit English dictioanrie wished for.

とある。この一文は，それまでに数多くの外国語辞書が出版されてきたがそろそろ英語本来語の単語と外来語の両方を集成した辞書があってもいい頃ではないかという，この時代の一般大衆の意志を反映した発言である。マルカスターは，この章で上述のような主張をした後，第25章では実際に，日常生活に使われる単語の語彙表を作成している。その中には，難解な外来語ばかりでなく，英語本来の基本単語も収録されている。例えば，第１頁目には，abandon, abbreviate, abbridgement, abolish, acceptance, accusation 等，全部で136語あるうちに about, ache が含まれている。第２頁には afraid, after, again, against, ago, Ah, air, aker, alas 等が含まれている。この語彙表は１頁４段組156語が56頁あるから約8,800語を収録していることになる。

マルカスター以前の，外国語の見出し語を英語で説明した辞書に加えて，マルカスターの難解語と日常英語の語彙集まで進んでくれば，英語を英語で説明する辞書，即ち，英語にとっての“国語辞書”まではあと一歩である。その一歩を更に縮めたのが，クート（E.Coote), *The English Schoole Maister*（1596）である。クートの本は，ホリバンド（Hollyband, 1573），ベロット（Bellot, 1580），等と同じく語学学習書であるが，英語辞書発達史の上から非常に重要な位置を占めることは巻末の英語語彙集を見れば明らかである。即ち，クートは，グラマー・スクールの初歩の課程を自習する目的で編集された１～３部の後に，約1,500語の難解な語の，英語による説明を試みている。「英語の未習熟者への説明（Directions for the vnskilfull)」（南雲堂版，pp.306-7）で，ローマン体の見出し語はラテン語からの借用語，イタリック体の見出し語はフランス語からの借用語等，この語彙集で用いられた字体，記号などの説明の後，語彙集は次のように始まる。

Abandon	cast away.
abba	father.
abesse	abbatesse, mistress Of a Nunnerie.
abbreuiat	shorten.

abbridge	see abbreuiant.
abbut.	to lie vnto.
abecedarie	the order of the letters, or he that vseth them.
abet.	to mainteine.

(E.Coote, *The English Schoole Maister,* 1596, pp. 307-8)

クートの語彙集は，独立した辞書ではなく英語学習書の一部であり，語数も少なかったために，英語史上初の英語辞書の栄誉を担うことができなかったが，実質的には，英語史上初の英語辞書と称されるコードリの辞書に決して劣るものではない。

多くの外来語辞書編纂の経験と語学学習書を通じて生じた英語辞書誕生への環境は完全に整った。マルカスターの英語辞書への希望，その希望を半ば果たしたクートの英語語彙集により条件は完全に満たされ，初めての英語辞書がまもなく誕生する。

第5章　初期の英語辞書：難解語辞書

(1) Robert Cawdrey, *A Table Alphabeticall* (1604)

(研究社『英語学文献解題』第9巻に掲載予定)

(2) John Bullokar, *An English Expositor* (1616)

1616年にはブロカーの，*An English Expositor* が出版された。総語彙数は，コードリの倍の約6,000語で，広く諸学問分野から専門用語を集め，その見出し語がどの学問分野に属するかを示す，あるいは，当時すでに古語となっていた語にはその旨を＊印で示す，というブロカーの編集意図，工夫は序文に見ることができる。

(...) and diuers termes of art, proper to the learned in Logicke, Philosophy, Law,

Physicke, Astoronomie, &c.

(Bullokar, *An English Expositor,* 1616, "To the Courteous Reader")

専門用語の例を示す。

Arismetike, The art of numbring: It is written that Abraham first taught this art to the Egyptians, and that afterward Pythagoras did much increase it.

Astronomie. An art that teacheth the knowledge of the course of the planets and stars. This art seemeth to be very auncient, (以下省略)

Cosmographie. An art touching the description of the whole world. This art by the distance of the circles in heaven, divideth the earth under them into her Zones and climats, and by the elevation of the pole, considereth the length of the day and night, with the perfect demonstration of the Sunnes rising and going downe.

Hononymie. A term in Logicke, when one word signifieth divers things: as Hart: signifying a beast, and a principall member of the body.

Philosophie. The study of wisedom: a deep knowledge in the nature things. (以下省略)

諸学問分野の説明はトーマスの『ラテン語＝英語辞書』に負うところが大きい。その例として，ブロカーの上の見出し語のうち，***Astronomie.*** とその関連語である Astrolabe をトーマスと比べてみる。

Thomas (1587)	**Bullokar (1616)**
Astrolabium,	**Astrolabe.**
An instrument whereby the motion of the starres is gathered.	An instrument of Astoronomie to gather the motion of the starres by.

Astronomus (...)
Which hath skill and knowledge of the starres.

Astronomie.
An art that teacheth the knowledge of the course of the planets and stars.
(以下省略)

ブロカーの辞書で初めて見られるもうひとつの特徴は，古語に＊印を付けて明示したことである。

Remember also that euery word marked with this mark＊is an olde word, onely vsed of some ancient writers, and now growne out of vse.
(巻頭，"An Instruction to the Reader".)

古語の指示が続くのは g の項である。

*Gippon. A doublet; a light cote.
*Gipsere. A bagge or pouch.
*Gisarme. A certaine weapon.
*Gite. A gowne.
(GI の頁。この頁は総計23語のうち，12語が古語，頁付けがなく，語頭のアルファベットにより掲載箇所を検索する)

ブロカーがコードリの辞書に負うところが多大であることは以下の各見出し語に与えられた説明から例から明らかである。

Cawdrey, (1604)
anarchie,
(gr) when the land is without a prince, or gouernour.
antipathie,

Bullokar, (1616)
Anarchie.
Lacke of gouernment: all time when the people is without a Prince or Gouernour.
Antipathie.

(g) contrarietie of qualities.	A contrariety or great disagreement of qualities.
brachygraphie,	***Brachygraphie.***
(g) short writing.	A short kinde of writing, as a letter for a word.
demonaick,	***Demoniacke.***
(g) possessed with a deuill.	Possessed with a diuell.
diapason,	***Diapason.***
(g) a concorde in musick of all parts	A concord in musicke of all.
elench,	***Elench.***
(g) a subtill argument	A subtill augument.
ermite,	***Eremite.***See ***HErmite.***
(g) one dwelling in the wildernes.	***Hermite.***
	One dwelling solitarie in wildernesse attending onely to deuotion.
	(ブロカーには語源の表示はない)

特に，コードリの demonaick は掲載された位置が正しいアファベット順ではなく，deacon と deambulation との間にあって，正しい位置より２頁程前にあるのに定義はブロカーと全く同じである。ただし，ブロカーの辞書の総語彙数はコードリの倍以上であるが，コードリに掲載されてブロカーでは削除された語ももちろんある。例えば，agglutinate，antecessor，artifice，perfricate 等。

ブロカーの辞書は，ブロカーの死んだ1642年に第３版を出版し，その後も何度か改訂を加え，1707年に最後の改訂版を出版し1731年まで印刷出版された。

(3) Henry Cockeram, *The English Dictionarie, or An Interpretor of Hard English Words* (1623)

コケラムの辞書は表題にある通り「難解語辞書」である。全体は３部からな

り，第1部はいわゆる「難解語」辞書であり，第2部は，THE SECOND PART OF THE ENGLISH TRANSLATOR と題して，日常基本語の英語（vulgar words）を，洗練された上品な英語（more refined and elegant speech）にパラフレイズしている。第3部は，THE THIRD PART, TREATING OF GODS AND GODdesses, Men and Women, Boyes adn Maids, Ginats and Diuels, Birds and Beasts, Monsters and Serpants, Wells and Riuers, Herbes, Stones, Trees, Dogges, Fishes, and the like. と題して，いわば小百科事典の趣をなしている。第3部は，OE 期の主題別外国語辞書を思い起こさせる。

コケラムの辞書の特徴は，第1に，書名に dictionarie という単語を，英語の国語辞書としては初めて用いたこと。第2に，英語辞書としては初めて百科事典の項目を設けたこと。辞書に百科事典の性格を持たせることは，その後の英語辞書編纂のひとつの流れとなり，特にアメリカ産の辞典に受け継がれている伝統である。

コケラムは，「英語辞書の編纂は自分よりも先行するものがあるが，自分は辞書に最後の仕上げをしたばかりでなく，完璧になものにした（what any before me in this kinde haue begun, I haue not onely fully finishied, but throughly perfected (A Premonition from the Author to the Reader)」と自信の程を示している。

コケラムもコードリに負うところが大きい。コードリとコケラムで同じ見出し語を比べて見る。

Cawdrey, (1604)	**Cockeram, (1623)**
anarchie,	***anarchy,***
(gr) when the land is without a prince, or gouernour.	When the kingdome is without a King.
antipathie,	***antipathy,***
(g) contrarietie of qualities.	A disagreement of qualities.
brachygraphie,	***brachigraphy,***

(g) short writing.	A short kind of writing, as a letter for a word.
demonaick,	***Demoniacke.***
(g) possessed with a deuill.	One possest with a deuill.
diapason,	***Diapason.***
(g) a concorde in musick of all parts.	A concord in musicke of all.
elench,	***Elench.***
(g) a subtill argument	A subtle argument.
ermite,	***HErmite,***
(g) one dwelling in the wildernes	A solitary dwelling in the wildernesse, attending onely to deuotion.

コケラムの説明は，コードリ，ブロカーに比べて簡潔であるが，中には長いものもある。例えば，feofment, predicament, tribune, zone 等。

コケラムはコードリから多く借用しているが，ブロカーから借用した単語，意義説明も多い。ブロカーの辞書の p の項目中のギリシア借用語総計29語のうち，以下の27語を借用している。

Palinodia, Parable, Paradice, Paradox, Parallels, Parasite, Parenthesis, Patheticall, Patriarch, Pentecost, Period, Phantasme, Phylacterie, Phylosophie, Phlebotomie, Phrase, Physiognomie, Planet, Poem, Poet, Pole, Poligamie, Practicall, Probleme, Prognosticate, Prophetical, Proselyte

以上のギリシア借用語のうち，Paradice, Phantasme, Phrase, Poet, Practicall, Probleme, Prophetical, Proselyte の８語は全く同じ定義であり，Paradox, Parenthesis, Patheticall, Patriarch, Prognosticate, Palinodia, Parable, Parallels, Parasite, Pentecost, Period, Phylacterie, Phylosophie, Phlebotomie, Physiognomie, Planet, Poem, Pole, Poligamie の19語はほとんど同じ定義である。

次にブロカーとコケラムとを同じ単語で比べてみる。

Bullokar, (1616)

Agony.

A torment of body and mind: great great feare and trembling.

Analogie.

Proportion, agreement, or likenesse of one thing to another.

Analysis.

A resolution or explicating of an intricate matter.

Antipathie.

A contrariety or great disagreement of qualities.

Apocrypha.

That which is hidden and not knowne. Doubtfull.

Apostasie.

A reuolting or falling away from true religion.

Brachygraphie.

A short kinde of writing, as a letter for a word.

Caligraphie.

Faire writing.

Symbole.

A short gathering of principal points together.

Tetrarch.

Cockeram, (1623)

Agony,

Torment of body and minde, great feare and trembling.

Analogie,

Proportion, likenesse of one thing to another.

Analysis,

A resolution in doubtfull matters.

Antipathy,

A disagreement of qualities.

Apocrypha,

Hidden, doubtfull, not knowne.

Apostasie,

A reuolting or falling from true religion.

Brachygraphy,

A short kinde of writing, as a letter for a word.

Caligraphy,

Faire writing.

Symbole,

A short gathering of principall points together.

Tetrarch,

A Prince that ruleth the fourth part of a Kingdome.	A Prince ruling the fourth part of a kingdome.

(4) Thomas Blount, *Glossographia* (1656)

ブラントの辞書のタイトルは，Glossographia: OR A DICTIONARY, Interpreting all such Hard words, Whether Hebrew, Greek, Latin, ..., French, ... as are now used in our refined English Tongue. Also the Terms of Divinity, Law, Physick.... With Etymologies, Definitions, and Historical Observations on the same. とある通り，やはり難解語辞書である。ブラントの辞書の特徴は，従来の辞書に比べて比較的長い「序文（TO THE READER)」にブラント自身が書き記している。

まず第１に，学術用語の説明が詳しくなっているのはブラントが弁護士であり，また，ラステルの『法律用語集』（J.Rastell, *Terms of the Law,* 1667）を編集したという経歴による。現に，ブラントはラステルの辞書の説明を借用している単語がある（Baston, Borrow, English, 等）(Starnes & Noyse, p. 40)。

第２に，コードリ，ブロカーと同じく，トーマスの『ラテン語＝英語辞書』とホリヨークの『語源辞典（F.Holyoke, *Dictionarium Etymologicum,* 1639)』を大いに借用し，活用している。(Starnes & Noyse, p.42)

Blount (1656)	**Holyoke (1639)**	**Thomas (1632)**
Adequate (adaequo) make even, plain or level, to advance himself, that he may be even with or like to another.	Adaequo (...) To make even, equall, or plaine, to make like, to mach, to attaine.	Adaequo (...) To make even, plaine, or alike: to advance, himselfe, that he may be like or equall to another.

スターンズ＆ノイズによればブラントの語彙の58％はトーマスとホリヨー

クからの借用である。

第3に，辞書に掲載した単語がブラント自身が造語したのではない証拠として，ベーコン，ブラウン，ディグビイ (Lord Bacon, Dr. Browne, Sir K. Digby) 等，その単語を用いた作家の名前の記載している (TO THE READER)。辞書に原典の作家名を記載したのはブラントが初めてである。

Emaciate (...)

to make lean, or pull down, in flesh. Br.[= Browne]

Efflorescence (...)

the outward face, or superficies, the upmost rind or skin of anything, also a deflouring. Bac.[= Bacon]

第4に，英語の辞書で，語源となる単語を記載したのはブラントが最初である。その例。

Licitation (licitatio) a setting out to sale; a prizing or cheaping.

Licite (licitus) lawful, granted.

Ligneous, Lignean (ligneus) of wood or timber, wooden, or full of wood.

ブラントは，単語の語源を興味深く書いているのも特徴のひとつ。

Bandit (Ital.) Out-laws, Rebels, Fugitives, condemned by Proclamation; Bando in Ital. signifying a Proclamation. These in the Low-Countries are called Free-booters; in Germany, Nightingale; in the north of England, Moss-Troopers; in Ireland Tories.

July (Julius) this moneth was called July in honor of Julius Cæsar, the Dictator, being before called Quintlis or the fifth month from March; which according to Romulus, was the beginning of the yeer. It was so called, either because Julius Cæsar was born in that month or because he triumphed in that month, after

his Naval victory over Cleopatra Queen of Egypt, and her husband Antony.

他に，Hony-moon，Tomboy が有名。ブラントによる故事来歴の説明は興味深いが，現代の我々にとっては信頼できないものもある。

ブラントは，項目によってはかなり長い説明を与えている。例えば，Artery, Assize, Augury, Babel, Divination。

ブラントは，自ら「序文（TO THE READER)」で述べているようにミンシュウ（Minsheu）やトーマスの『ラテン語＝英語辞書』，更には，コトグレイブ(Cotgrave）の『フランス語＝英語辞書』に大きく依存しながら多くの難解語を収録した。一方，コードリやブロカーから借用した語も多いのも事実である。ブラントとブロカーを比較してみる。

Blount, (1656)	**Bullokar (1616)**
Allegory (allegoria)	***Allegorie.***
a dark speech or Sentence,	A sentence consisting of divers
which must be understood other wise	tropes which must otheerwise
then the literal interpretation	then he liteteral interpretation
shews. As when St. I.	shewth;as when saint John
Baptist, speaking of our Saviour,	Baptist speaking of out Saviour,
Matt. 3. said, (以下省略)	Matt. 3. said, (以下省略)
Antichrist (antichristus)	***Antichrist.***
An enemy or adversary to Christ. It is	An aduersary to Christ:It is
compounded of the Greek proposition	compounded of the Greeke
Anti and Christus, which signifies	preposition Anti, and Christus,
contrary or against Christ.	which signifieth contrary or against Christ.
Astronomy (astronomia)	***Astronomie.***
a Science that teacheth the knowledge	An art that teacheth the nowledge
of the course of the Planets, Stars and	of the course of the Planets & Stars.

other celestial motions. This art seems to be very ancient, for Josephus *lib*.1. *Antiq*. writes that the Sons of Seth, Grand-children to *Adam,* first found it cut,; (以下省略)	This art seemeth to be very auncient, for Iosephus: *lib*. prim. *Antiq*. writeth that the Sons of Seth, Nephewes to *Adam,* (for Seth was Adams sonne) did first first found it out; (以下省略)
Axiome (axioma) A maxim or general ground in any Art: a Proposition or short Sentence generally allowed to be true, as in saying The whole is greater then its part.	***Axiome.*** A Proposition or short Sentence generally allowed to be true, as in saying the whole is greater then its part.

トーマスやミンシュウの『ラテン語＝英語辞書』やコードリやブロカーの『難解語辞書』を最大限に活用しながら編纂されたブラントの辞書に収録されたラテン語は，難解語ではあったが，結果として英語の語彙に吸収され，根付いていった語が多い。

「読者へ」と題する序文に見るかぎり，ブラントはかなりの自身を持っていたように見受けられる。従来の難解語辞書の対象が，「教育を受けられない婦女子や教養のない人々」であったのに対し，ブラントは，更には「もっとも優れた学者にも有用である」と宣言しているからである。

> I think I may modestly say, the best of Schollers may in some part or other be obliged by it.
>
> (TO THE READER)

(5) Edward Phillips, *The New World of English Words* (1658)

1658年に，それまでの英語辞書発達の経緯から当然予測された事件が起こっ

た。エドワード・フィリップスの出版した辞書が，先に出版されたブラントから剽窃の非難を浴びたのである。フィリップスは，ブロカーやコケラムからも，そっくりそのまま剽窃しているが，特にブラントからの剽窃は度を越している。これまでコードリからブラントまで例としてあげてきた単語を，ブラントとフィリップスから取り上げて同じ方法で比べてみるとほとんど同じである。

Blount, (1656)

Analysis (Lat.)
a resolution or unfolding of an intricate matter:or a resolving or distribution of the whole into parts.

Demoniach (demoniacus)
possessed with a devil, divellish, furious.

Elench (elenchus)
an argument subtilly reproving.

Geomantie (geomantia)
divination by points and Circles made on the earth, or by opening of the earth.

Palinodie (palinodia)
a recontation,a contrary song, an unsaying that one hath spoken or written;the sound of the retrait.

Parallels (Gr.…, i. equaliter distans) lines running of an equal distance from each other, which can never meet, though they be drawn infinitely in length thus ═══
In Astoronomy there are five

Phillips, (1658)

Analysis, (Greek)
a resolution of doubtful matters, also a distribution of the whole into parts.

Demoniack, (Greek)
possesed with a Devil, or evil spirit.

Elench, (Greek)
a subtile, or argumentary reproof.

Geomanty, (Greek)
a kinde of divination, by certain Circles made on the earth.

Palinode, or ***Palinody,*** (Greek)
a recantation or unsaying what one had spoken or written before.

Parallels, (Greek)
a Term in Geometry, lines running at an equal distance one from the other and never meeting, in Astronomy they are certain imaginary Circles in the Globe, for the better Calculation of the

such imaginary lines (以下37行省略)	degrees of Northern, or Southern Latitude.
Pathetical (patheticus) passionate, perswasive, that moveth affection.	***Pathetical,*** (Greek) apt to perswade or move the affections.
Pentecost (Gr. Pentecoste. i.the fiftieth) The Feast of Pentecost or Whitsontide, so called because it is the fiftieth day from the Resurrection of Jesus Christ.	***Pentecost,*** (Greek) the feast of Whitsuntide, so called, because it is the 50th day from Christ resurrection.
Polygamie (polygamia) the having of many wives, or of more then one.	***Polygamy,*** (Greek) the having many more wives than one.

そこでブラントは1673年に，“A World of Errors Discovered in the New World of words, or General English Dictionary, and in Nomothetes, or The interpreter of Law-Words and Terms” という非難の論文を発表した。それによると剽窃らしきことは辞書の内容だけでなく，序文にも見られる。というのは，フィリップスはその序文で，多くの専門学者の協力を得たとしているが，その内の主だった学者達が，自分達はフィリップスとはまったく関係がないと言っているという。要するに，フィリップスは，従来通り『ラテン語＝英語辞書』やコードリ，コケラムも参照したが，ほとんどをブラントの辞書から借用した。その序文までもブラントからかなりの部分を借用している。

フィリップスの辞書は，初版の語彙数が約11,000語，1696年の第５版では17,000語，ジョン・カージイによる最終第６版では38,000語に及ぶ。

フィリップスの辞書の長所と言えば，序文に英語史に関する記述を初めて書き加えたこと，また，コケラムがすでに実践していたが不十分であった人名，地名に関する情報を，専門家の協力のもとに充実させたことである。人名，地

名についてはカージイがさらに充実した編纂をすることになる。

(6) Elisha Coles, *An English Dictionary* (1676)

1676年にエリシャ・コールズが八つ折り版で (octavo), *An English Dictionary* を出版した。コールズは，ラテン語，英語の先生であり，自ら速記の本を出版したり (1674)，ラテン語の辞書を出版したりした (1677)。コールズの辞書は，彼以前に出版された英語辞書の枠組みに従って編纂されたものであり，格別創意工夫といえる特色はない。しかし，英語辞書が，コードリ以来積み上げてきた，近代辞書として要求されるいろいろな要件の集大成をした人として評価できる。つまり，辞書本体ばかりでなく，辞書としてのあるべき全体象を作りあげたのである。事実，コールズの辞書には先行するどの辞書よりも現代の我々に身近な印象を受ける。

コールズも，彼以前の編纂者と同じように先行辞書に依存するところが大きい。辞書のタイトル頁も，フィリップス等とほとんど同じうたい文句である。収録語彙，定義は特に，直前のフィリップスの辞書に負うところが多い。

> AN ENGLISH DICTIONARY: EXPLAINING The difficult Terms that are used in Divinity, Husbandry, Physik, (...), and other Sciences. CONTAINING Many Thousands of Hard Words (and proper names of Places) (...) TOGETHER WITH The Etymological Derivation (...) In a Method more comprehensive, than any other that is extant.
>
> By *E. Coles,* School-Master and Teacher of the Tongue to Foreigners.
>
> (E.Coles, *An English Dictionary,* 1676, タイトル頁)

諸学問分野の語彙，難解語，地名，語源といった要素はいずれも彼以前の辞書に見られたものである。ただし，どの要素をとってみても「今までのどの辞書よりも包括的である (more comprehensive, than any other that is extant)」とい

うところがコールズの特徴である。

フィリップスとコールズとを比べてみる。

Phillips, (1658)	**Coles, (1676)**
Antichrist, (Greek) an opposer of Christ	**Anti-christ, g.** Opposer of Christ.
Antidote, (Greek) a Medicine given to preserve one against poyson, or infection.	**Antidote, g.** medicine against poyson.
Antipathy, (Greek) a secret contrariety in contrariety. nature, a contrariety of humorous and inclinations.	**Antipathy, g.** a secret and natural.
Apocalyps, (Greek) a revelation, or unfolding of a dark mystery, a title given to the last book of the holy Scriptures, written by St. Johnin the Isle of Patmos.	**Apocalypse, g.** Revelation
Apologie, (Greek) a justifying answer, Apologism, an excuse, or desence.	**Apology, g.** desence, excuse.
Apostasie, (Greek) a revolting, a falling away, or desection from ones duty, or first prosession.	**Apostacy, g.** revolting, falling away.
Arithmetick, (Greek) the art of numbling.	**Arithmetick, g.** the Art of numbling

Astrologie, (Greek) the art of foretelling things to come, by the motions and distances of the stars.	**Astrology, g.** foretelling things to come by the motions and distances of the stars.

フィリップスとコールズとを比較して，すぐ分かることは，コールズはフィリップスに全面的に依存しているということであり，また，コールズの定義はフィリップスよりも必ず短いということである。このことは上の引用例にとどまらず，辞書全体についていえる。説明が短くなったことで説明不足の点も生じたが，非常に簡潔明瞭になったという利点も生じた。

些細なことのように見えるが，前付きに「略語表」を付けたことは，利用者への配慮として，また，近代英語辞書の要素のひとつを新たに加味したといえる。「略語表」の例。

A Table explaining the Abbreviations made use of in this Book.

A.	Arabick.	No.	North-Country.
C.	Canting.	Not.	Nottinghamshire.
Cu.	Cumberland.	Sy.	Syriack.
E.	Essex.	W.	Wiltshire.
Ga.	Gallick, old French.	We.	West-Country.
O.	Old Word.	Y.	Yorkshire.

また，これも些細なことのように見えるが，序文と辞書本体との間の空きページを利用して，日常基本語の同音意義を一覧表にして，発音，綴り字，用法上の注意としていることもコールズの創意工夫のひとつであって，辞書の利用価値を高めている。

To prevent a vacancy, I thought good here to prefix a Catalogue of the most usual words, whose sound is the same, but their sense and Orthography very different.

ALtar, for sacrifice.	Dear, costly.
Alter, change.	Deer, Venison.
Air, Element.	Done, acted.
Heir, to an estate.	Dun, colour.
Assent, consent.	Eaten, Devoured.
Ascent, of a hill.	Eaton, a proper name.

辞書本体で，目立った進展は，地名，固有名詞が一層充実したこと，方言と隠語（canting terms）が今までになく幅広く収録されたこと，どの地方の方言かが明示されたことである。方言の例で，No. は北部方言，So. は南部方言。古語の例で o. が old で古語の意。隠語の例で，c. が cant で隠語の意。

方言の例	古語	隠語
Hose, as Hause, also to *hug* or carry in the arms, *No.*	*Humling, o.* sounding like a humble bee.	*Cassen, c. cheese.*
Hoste, No. Cough:see *Haust.*	*Hurtleth, o.* carries, throws.	*Dommerar, c.* a mad *woman*
Haust. l. [=Latin]a soop or draught in drinking, (*No.*) a dry cough.	*Ishad, Ished, o.* scattered.	Gentry Cove or Mort, c. Gentleman or woman.
		Husky lour, c. a guinny.
	Ishbet, o. shut.	*Roger, c.* a Cloak-bag.
Hover ground, So. Light ground	also *Ishorn, o.* (for shorn)	*Romboyld, c.* with a warrant.

House, the twelfth part of the Zodiack, also (*No.*) the Hall.

Ishove, o. set forth, shown. docked. (?)

Isped, o. dispatched.

Ispended, o. considered.

Skew, c. a dish.

Smiter, c. an arm.

コールズが，隠語を収録した根拠を，「隠語を理解していることは不名誉なことではない。[隠語を知っていれば，賊に襲われたときに]（すくなくとも）喉を掻き切られないですむかもしれないし，また，ポケットの中のものを盗まれないですむかも知れない。」と序文で述べていることは有名である。

コールズの総語彙数は，隠語，方言，古語を含めて約25,000語である。辞書編纂の上で殊更に新味といえる貢献はないけれども，辞書の前付きのありかた，方言，古語，隠語，語源の収録，イングランドのみならずヨーロッパの主要都市名の収録等，近代英語辞書に要求される要件をほぼ備えていたといえる。初期近代英語の難解語の解説を目的とした辞書はコールズが最後であり，続いて出版されたカージーの辞書が，英語の辞書としては初めて日常語を収録して，近代英語辞書としての基本要件がすべて整えられたことになる。しかし，コールズの辞書に日常基本語への関心がなかったとはいえない。辞書本体の中に日常基本語が収録される一歩手前の状況がコールズにある。即ち，コールズの辞書の前付きには，日常基本語で誤りやすい同音意義語のリストが掲載してある。前付きにある同音意義語のリストが辞書本体に組み入れられさえすれば，カージーの辞書になるのであるから，コールズは，辞書本体に組み入れてはいないが，難解語の説明を目的とした従来の辞書と違って日常基本語をも収録したという意味で，近代英語辞書編纂史上画期的な出来事であったカージーの辞書への貴重な示唆を提供している。近代英語辞書にとって国語辞書として最後に残された必要条件である日常語彙の収録は，コールズにより条件整備が行われ，カージーが実行して，ここに近代英語辞書が国語辞書と称しうる段階にまで発展した。そして，コードリの「日常使われる難解語」の辞書が復活した。

(7) John Kersey, *A New English Dictionary* (1702)

（研究社『英語学文献解題』第９巻に掲載）

(8) N. Bailey, *An Universal Etymological English Dictionary* (1721)

(9) N. Bailey, *Dictionarium Britannicum or a more COMPLEAT UNIVERSAL ENGLISH DICTIONARY* (1730)

（(8)と(9)は研究社『英語学文献解題』第９巻に掲載）

(10) T.Dyche & W.Pardon, *A New General English Dictionary* (1735)

ベイリーとジョンソンとの間に，ベイリーに追随する多数の辞書が出版されたらしいが，そのうちでひとつだけ取り上げるとすれば，ダイチ—パードンの辞書であろう。*A New General English Dictionary* (1735) と称するこの辞書は，ベイリーの辞書が規模の大きさを誇ったのに反して，日常の使い易さを考えて編纂された。そういう意味では，18世紀の前半になってやっと辞書編纂という仕事にかなり明確な意図が伺われる。即ち，ただひたすら，先行する辞書よりも多数の難解な外来語や，見知らない固有名詞を収録するという姿勢から，読者の立場に立った（user friendly)，辞書の目的を意識した編纂が実践されるようになったといえよう。

ダイチ—パードンの辞書の特徴は，まず，辞書巻頭の前付きに「英文法（A Compendious English Grammar)」を英語辞書として初めて付けたことである。辞書の巻頭に簡単な文法を付けるという習慣はこの時に始まった。その冒頭の一文，

GRAMMAR is that Art or Science that teaches Persons the true and proper Use of *Letters, Syllables, Words* and *Sentences,* in any Language whatever.

(Dyche-Pardon, A Compendious English Grammar)

は，当時の「文法は，読み書きと話し方の技術を教えるものである」という考え方を表明している。また，文末の in any Language whatever. という文句は，grammar という語が以前はラテン文法のみを意味していたので，わざわざその他の言語の文法，具体的には英文法も含むということを断っているのである。

第2に，見出し語にアクセントを付けたことである。見出し語にアクセントを付けること自体は，ベイリーが既に実践したが，ダイチ—パードンは，そのことをタイトルページで明記しているのである。

> A New General English Dictionary...Wherein the difficult WORDS, and Technical TERMS made use of in ANATOMY, ARCHITECHTURE, ..., SURGERY, &c. Are not only fully explain'd, but accented on their proper Syllables to prevent a vicious Pronunciation;...
>
> (*A New General English Dictionary*, タイトル頁)

コードリからベイリーまでは，次々に出版される辞書はすべて，先行するどの辞書よりも少しでも大きくするという編纂方針のもとにひたすら肥大化してきた。ところが，ダイチ—パードンは，それまでの辞書編纂の慣習を打ち破り，内容の豊富さよりも辞書としての使い易さを優先させ，初めて先行する辞書よりも小型の辞書を出版した。このことはダイチ—パードンが辞書編纂という事業に初めて明確な意図をもたらしたことを意味している。即ち，ダイチ—パードンは辞書利用者の立場に立って辞書の内容を分かり易くした。ベイリーまでの辞書が「無教育者 (un-educated)」を対象とするとうたいながら，一般庶民には無縁と思われる，非常に専門化した難解な見出し語を多く収録し，繁雑になり過ぎていたのに反し，ダイチ—パードンは，実際に，あまり教育を受けていない人々と，外国語を知らない人々を対象にした。具体的には，彼ら以前の辞書が，先行する辞書よりもひたすら増加させ続けてきた語彙数を初めて減らしたこと，語源に関する情報を排除したこと，ベイリーにより細分化され，専門分野別に詳細に述べられていた語義を一切排除して一般の人々の知識で十分

読めるように簡潔化するという配慮をしたことである。語彙についていうと，ベイリーの *Dict. Brit.* (1730) が48,000語を収録し，再版 (1736) では60,000語を収録していたのに反し，ダイチ—パードンでは20,000語しか収録していない。

結局，ダイチ—パードンは，読者への明確な配慮を打ち出したこと，即ち，辞書編纂という仕事に読者への配慮を加味するという意識革命をもたらしたという意味で，英語辞書編纂史上，極めて特異な貢献を果たしたのである。そのダイチ—パードンもベイリーを巧みに利用していることは以下の引用から分かる。

Baily (1730)

ORRERY, an astoronomical
Machine contriv'd for giving ocular
Demonstration of the solar System.

Egyptians [in our statutes] a counterfeit
kind of rogues, and their doxies or
whores, being *English or Welsh* people,
disguise themselves in odd and
uncouth habits, smearing their
faces and bodies, and framing
to themselves an unknown, canting
language, wander up anddown the
country; and under pretence of
telling fortunes and curing diseases,
&c. abuse the ignorant common
people, tricking them of their money,
and live by that and together, with
filchig, pilfering, stealing, &c.

Dyche-Pardon (1735)

O'RRERY(S.) a famous mathematical
machine, contrived to demonstrate the
present system of astronomy, or the
earth's mobility

EGYP'TIAN (S.) an inhabitants or
native
of the country called *Egypt;* also a
pretended
fortune-teller, or stroller about the
countries.

EGYP'TIAN (A.) something that
grows or comes out of the country
called *Egypt.*

次に，ベイリーの *Dict. Brit.* (1730) とダイチ—パードンとを比べることにより，内容がどれほど簡潔になっているかをみる。ベイリーのほうは，ダイチ—パードンと対応する部分のみを掲げる。

Dictinarium Britannnicum (1730)	**Dyche-Pardon**
ANALOGY, like Reason, Proportion Correspondence; Relation which several Things in other Respects bear to one another.	**ANA'LOGY** (S.) the similar relation or prportion wich one thing bears to another.
ANALOGY [with Grammarians], the Declning of a Noun, or the Conjugation of a Ver b according to its Rule or Standard.	(ダイチ—パードンになし)
ANALOGY [with Mathematicians], the Comparisonof several Ratio's of Numbers or Quantities one to another.	(ダイチ—パードンになし)
ANALYSIS, the dividing, parting or severing a Matter into its Parts.	**ANA'LYSIS** (S.) the art of resolving qyestions that are difficult, by reducing them to their thence shewing the possibility or impossibility of the proportion; also the chymical reducing metals, &c. to their first principles; and in Anatomy, it is the dis-secting of a human body according to art.
ANALYSIS [Anatomy], an exact and accurate Division of all the parts of a human Body, by a particular Dissection of them.	
ANALYSIS [with Chymists], the decompounding of a mixt Body, or the reducing any Substance into its first principles.	
ANALYSIS [with Logicians],	(ダイチ—パードンになし)

ANALYSIS [with Mathematicians],
is the Art of discovering the Truth
or Falshood of a Proposition, by
supposing the Question to be always
solved and then examining the
consequences, till some known or
eminent Truth is found out; or
else the Impossibility of the present
Proposition is discovered.

(ベイリーには***ANALYSIS***という項目がさらに2つあるが，ダイチ—パードンにはない)

近代英語辞書として備えるべき要件をすべて，しかも最大限に備えたベイリーであるが，更に読者への配慮という要素を認識するように注意を喚起し，辞書編纂家に意識革命をもたらしたダイチ—パードンの貢献は大きい。

(以下次号)